

## 德尔智耶夫相关史事议补

周 太 平\*

### 前 言

关于德尔智耶夫研究,已有不少研究成果。本文在前贤考订的基础上,对二十世纪初期有关德尔智耶夫政治活动及水鼠年蒙藏条约探究方面作了进一步的补充,涉及十三世达赖喇嘛<sup>1</sup>及西藏政治局势与大库伦、北京、伦敦、彼得堡之间的错综复杂关系。

这方面的主要研究有:《达赖喇嘛传》<sup>2</sup>、《现代西藏的诞生》<sup>3</sup>、《西藏问题的历史渊源》<sup>4</sup>、《喇嘛王国的覆灭》<sup>5</sup>、《沙皇俄国的西藏政策》<sup>6</sup>、《达赖喇嘛的外交官德尔智耶夫:西藏佛教世界的二十世纪》<sup>7</sup>、《二十世纪前半期的蒙古与西藏》<sup>8</sup>、《策尼宏博·阿旺·德尔智耶夫略传》<sup>9</sup>、《阿旺·德尔智耶夫—生命的最后一》<sup>10</sup>、《二十世纪上半叶俄罗斯—蒙古—中国:1911-1946年政治关系》<sup>11</sup>、《俄罗斯—西藏关系与阿旺·德尔智耶夫》<sup>12</sup>、《达赖喇嘛的特使—阿旺·德尔智耶夫》<sup>13</sup>等。这里只就笔者查询所及,列举一些相关论著,必有挂一漏万之嫌。

德尔智(Dorjjeff, Agvan, 1853—1938),全名阿古旺·德尔智耶夫,又称阿旺德尔智堪布,汉文文献表记为德尔智、阿格万、铎尔智等,俄文文献一般称为 Агван Доржиев (阿旺·多尔吉耶夫),系俄罗斯籍布里亚特蒙古人。出生于外贝加尔上乌丁斯克省霍林草原哈拉希毕利(今布里亚特扎格拉耶夫斯克地区),自幼为僧,1873年到西藏拉萨,进入哲蚌寺郭芒扎仓学经修业15年,1888年35岁获得西藏佛学高级学位—拉然巴格西,经哲蚌寺推荐成为陪十三世达赖喇嘛学习、辩论经义的参尼堪布。1897年十三世达赖喇嘛任命德尔智为西藏外交秘书<sup>14</sup>。

从十九世纪末到二十世纪前半期,中亚—内陆亚佛教世界发生了急剧的动荡和变化。西藏在同英国、沙皇俄国、清末民初的中国以及蒙古博格多汗政府之间的相互关系上,经历了一个重要历史阶段。这里不能不关注德尔智这一人物,他与十三世达赖喇嘛朝夕相处,博得信任,在处理西藏外交事务方面起到举足轻重的作用。对此,学界已有不同角度的诸多研究。本文仅从笔者视角择举数例,以更进一步阐明其地位和作用。

---

\* 内蒙古大学蒙古历史学系教授·东亚历史文化研究所教授

# 日本统治时期在内蒙古进行侵略活动的人物前川坦吉

娜仁格日勒\*

白红梅\*\*

## 序

关于善邻协会及其在内蒙古地区的文化侵略活动，拙文《日本善邻协会在内蒙古活动的记忆》<sup>1</sup>已有较详细的阐述。本文着重对善邻协会的重要成员前川坦吉进行详实的考察，从这一视角明确该组织在内蒙古西部地区所进行的侵略活动的具体过程和内容，进一步揭露其本质。

1934年初，日本军部为推进“满蒙”扩张政策设立的下属外围组织“善邻协会”，直到二战结束，一直活跃在内蒙古地区。善邻协会打着“善邻友好、文化向上”的旗号，开始时主要针对蒙古族，后来又包括回族、汉族，展开了调查、医疗、教育以及畜牧指导等活动，进行拉拢和怀柔，营造亲日氛围，实施渗透，进行文化侵略。而在其侵略政策的实施过程中，有不少活跃分子发挥了重要的作用，前川坦吉就是其中一个重要人物。

本文主要根据日本文化侵略组织善邻协会的回忆录《善邻协会史-在内蒙古的文化活动》<sup>2</sup>（以下简称《善邻协会史》）中的相关记载，对前川坦吉的活动及其侵略实质做一分析。该回忆录刊载了回忆前川坦吉的6篇文章。

首先简单交代一下前川坦吉，1886（明治19）年5月13日出生于兵库县，前川市次之子，曾是日本陆军中尉，中途退役，来到中国东北，任奉天特务机关长，支持巴布扎布独立运动，后加入善邻协会，历任善邻协会多伦班（后称苏尼特班）班长，蒙古善邻协会理事长兼任兴亚义塾校长，蒙古善邻调查所顾问，德王政府参议，1946年2月6日病死于北京。

## 一，1939年前在内蒙古地区的活动

本节主要考察并分析蒙古善邻协会成立前，前川坦吉在内蒙古地区的活动。

善邻协会于1934年1月由日本内务省认定为财团法人，4月组成两个事业班，第一班班长是藤中弁辅，第二班班长是前川坦吉。第一班经林西前往阿巴嘎贝子庙，第二班经多伦进入西苏尼特。<sup>3</sup>

\* 内蒙古大学外国语学院教授·东亚历史文化研究所教授

\*\* 呼和浩特民族学院 讲师

## 13 世纪及其以前蒙古人何时过新年续考（上）

——兼谈道尔吉·班札罗夫的说法及其所谓根据

阿尔丁夫\*

### 一、对道尔吉·班札罗夫“权威”观点的挑战

俄罗斯布里亚特蒙古学者道尔吉·班札罗夫于 1846 年在《喀山大学学报》第三卷上发表了《黑教或称蒙古人的萨满教》<sup>1</sup>一文。该文共分九个小标题。其中第八个为“萨满”，对萨满教起源及其语义等和临时祭祀等本人不感兴趣。感兴趣的只是其中古代蒙古人何时过新年部分。笔者否定道尔吉·班札罗夫所提出的“可能即从八月后一个月的第一天（即九月一日）开始过新年”说，而这绝不意味着我全盘否定《黑教或称蒙古人的萨满教》一文。这是必须说明的。他在该文中写道：

蒙古人和一切游牧民族一样，把一年十二个月都起上一个名字时，是和该月的自然现象的变化相适应的，都是用这个月里畜牧业所供给的生产品或这个月使用最多的东西命名的。例如：布里亚特人把六月叫做草月，[把七月叫做？月]，把八月叫做牛奶月。据马可波罗所说可得出结论：察罕萨拉即是八月后一个月，每年在八月二十八日举行祭礼，可能即从八月后一个月的第一天开始过新年。新年开始的这个月就叫做察罕萨拉，意思是奶酪的月份。因为前一个月——即八月，叫做“牛奶月”。

这段话里存在的问题较多。首先，蒙古人和一切游牧民族一样，在为“一年十二个月都起上一个名字时，是和该月的自然现象的变化相适应的，都是用这个月里畜牧业所供给的生产品或这个月使用最多的东西命名的。”值得注意的是，“这个月里畜牧业所供给的生产品”是客观存在的东西，而“这个月使用最多的东西”则是人们主观需要的东西。这里就碰到一个回避不了的问题：蒙古人在为“一年十二个月都起上一个名字时”究竟是依据客观存在的东西呢还是依据主观需要的东西呢？一旦这样提出问题，就使作者自己陷入第一个自相矛盾的尴尬境地。关于“这个月使用最多的东西”中的“使用”，指的是什么呢？回答是“吃”；“使用最多”指的是“吃的最多”。那么，“新年所在的这个月”，也就是阴历九月这个月，蒙古人和布里亚特人吃的最多的是什么呢？回答是“奶酪”。那么，奶酪是否是当月也就是阴历九月“畜牧业所供给的生产品”呢？作者自己也不得不承认，不是该月或秋季“畜牧业所供给的生产品”，而“是夏天准备下的”。这就使作者自己陷入了在为“一年十二个月都起上一个名字时”，究竟是依据该月畜牧业所供给的生产品呢还是根据此前其

\* 内蒙古师范大学教授

## 善邻协会的“内蒙古文化工作”与 日本关东军和兴亚院关系研究

包賀喜格图\*

笔者在《善邻协会成立的历史背景及成立过程详考》一文中就善邻协会的文化侵略活动得出的结论为，“善邻协会的文化侵略活动并不是孤立的偶然的史现象，而是日本大陆政策，特别是满蒙政策自清末以来发展演变直至伪满洲国傀儡政权和伪蒙疆政权成立这一历史背景下的产物，是日本近代大陆政策方针下的文化侵略政策几经调整，为适应“九一八事变”后日本实现其新的侵略利益需求的产物”<sup>1</sup>。日本近代大陆政策，特别是对华侵略政策中，文化侵略一直起着辅助军事、经济侵略的作用，对内蒙古地区的侵略过程中文化侵略同样也扮演了极为重要的角色。

视满蒙为“生命线”，加强和维护在“满蒙利益”一直是日本大陆政策的重中之重。一战之后建立的“华盛顿体系”，使日本不得不放弃独霸中国的野心，开始了“九·一八”事变前既要维护其“满蒙利益”，又要对美国采取“协调政策”的亚太战略期。打破“华盛顿体系”的约束，在与美国的角逐中建立以日本为主导的亚太地区秩序就成为日本在“华盛顿会议”后长期致力目标，而文化教育上对中国乃至对世界的影响力追求与军事、经济侵略目标一起构成了日本设想的亚太地区秩序的三个重要内容。日本大陆政策下对中国政策策略中的“对华文化工作”作为清末以来行之有效的侵略政策的辅助手段，正是在这一国际关系背景中开始重新策划实施的。在这一过程中，特别是伪满洲国成立后的日本新的对华侵略利益的图谋中，善邻协会应运而生。

阿部洋（2004）认为“九·一八”事变后，日本当时自诩的“超越当前政治与外交”，“重视纯学术研究”的“对华文化事业”已经开始变质，开始初步具有作为日本对华军事侵略的辅助手段的“对华文化工作”倾向，而且他还认为在“华北分离工作”开始实施之后，以兴亚院的成立为标志，“对华文化事业”彻底完成了向完全意义上的具有公开侵略性的“对华文化工作”的转变<sup>2</sup>。本文所论述的善邻协会的“内蒙古文化工作”与日本关东军和兴亚院关系，即1938年以前处于关东军的指导和管理之下，而1938年之后则开始公开接受兴亚院的指导和管理，恰恰反映了这种由“隐蔽”向“公开”过渡阶段的“对华文化工作”向完全“公开”阶段的侵略性的“对华文化工作”性质的转变。系统分析并揭示善邻协会与关东军和兴亚院关系的演变，可以让我们对善邻协会这一组织及其文化活动的性质有更为深刻的理解，也有助于我们更全面地把握和认识当时日本对华侵略政策的总体内容和本质特性。

\* 中国内蒙古大学外国语学院日本語系 副教授 日本語学部主任

## 内モンゴルにおけるチベット仏教の再興について

英 荷\*

**【要旨】**：内モンゴルは、チベット仏教世界の一部として存在し、チベット仏教は現在もモンゴル人に信奉されている。モンゴルへのチベット仏教の伝来は、2回にわたり行われた。1回目の伝来は13世紀で、チベット仏教のサキヤ派によるものであった。それは主に宮廷や貴族に信奉され、元朝の時期には国家宗教にもなった。元朝の終焉とともに、チベット仏教は衰退の道をしった。2回目の伝来は、16世紀である。アルタン・ハーンによりチベット仏教のゲルク派がモンゴル地域に伝えられた。ゲルク派のラマ僧たちはモンゴルの各地で布教を行い、広い地域に広がった。それ以降、モンゴルの各地域でチベット仏教寺院が建てられ、モンゴル人のほとんどがチベット仏教の信徒になった。清朝期、特に清朝前期はチベット仏教の最盛期で、内モンゴルに数多くの寺院が建てられた。「満州国」の時期、内モンゴル東部地域のチベット仏教に対し、改革・改造の政策が実施された。だが、当時のモンゴル人は変わらずチベット仏教を篤く信奉していた。1950年代になると、内モンゴルのチベット仏教は、再び衰退期に入った。中国で行われた「土地改革」、「文化大革命」の運動により、宗教は「迷信」とされ、すべての宗教活動が禁止された。内モンゴルにおいては、チベット仏教寺院が破壊され、ラマ僧たちは還俗させられた。だが、1980年代の改革開放後、全国各地の諸宗教は復活のきざしをみせ、宗教活動の場の復興や再建が始まった。内モンゴルにおいては、各地域で宗教活動が復活し、チベット仏教寺院などの宗教活動の場所も再建、復興された。

### はじめに

内モンゴルにおけるチベット仏教は、布教期、発展期、安定期、改革期そして禁教期などの時期を経て現在に至っている。その歴史を振り返ってみると、まず、チベット仏教が明朝に伝来した後、モンゴルの各地で布教が行われ、後金の時期に普及したとされる。そして、清政府の宗教政策により、清朝前期(康熙時代)にチベット仏教は発展し、最盛期に入った。清朝後期になると、チベット仏教は安定期に入るものの、次第に衰退に向かっていった。一方、満洲国が建立されると、日本政府は内モンゴルのチベット仏教の改革政策を打ち出した。そして、大戦後の1947年からチベット仏教は次第に衰退し、1966年

---

\* 内蒙古工業大学人文学院講師

## 日本教习菌部一郎的在滇活动

何大勇\*

## 序

晚清时期，云南林业朝向学习西方先进科学过程中，日本教习菌部一郎的在滇活动及研究内容有必要进行整理研究，对于审视云南林业的科考发端具有一定意义。本稿的研究内容一是根据日本档案中有关菌部一郎的记录进行整理，二是按菌部一郎在滇留下的研究内容一对西山调查以及禄丰村调查，来进行梳理。菌部的研究如植被、植物利用、造林等方面，对于今天重新审视生态变迁颇有裨益。此外，对禄丰村林场的调查研究史进行了梳理。

## 一 菌部一郎的来滇记录

日本学者横田素子在 2018 年 7 月云南民族大学承办的中韩日非物质文化遗产国际学术研讨会上发表了《日本近代资料阅看云南：关于明治时期资料中的日本教习》论文。在其论文中，提供重要的档案整理资料《清国雇佣招聘本邦人名表明治 41 年 1 月-4 月调查》的簿本。详细情况如下表 1 所示，表 1 中记述有高岛大次郎、迫田荣太郎、江部淳夫、池田太郎、河合绢吉、菌部一郎的 6 人，标注有姓名、月薪、职名、招聘合同期限年月、籍贯的信息。

表 1 1908 年 1-4 月簿本档案《清国雇佣招聘本邦人名表明治 41 年 1 月-4 月调查》

#	姓名	月薪	职名	合同年月	期限	出身地
1	高岛大二郎	银百 80 元 银 38 两	东文学堂教习 高等学堂教习	明治 36 年 [1903]12 月		京都府
2	迫田荣太郎	同 上 同 上	同 上 同 上	明治 37 年 [1904]10 月		广岛县
3	江部 淳夫	银 250 元	高等学堂教习	明治 39 年 [1906]2 月		新潟县
4	池田 太郎	同 上	同 上	同 上		东京都
5	河合 绢吉	同 上	同 上	同 上		爱知县
6	菌部 一郎	银 250 元	云南府高等学堂教习	明治 40 年 [1907]3 月	满 3 年	和歌山县

出自：横田素子，2020:271<sup>1</sup>

\* 云南民族大学 云南省民族研究所（民族学与历史学学院）研究员·东亚历史文化研究所教授

## 海印寺 木造毘盧遮那佛像 腹藏 服飾 및 織物의 特性

박 윤 미(朴 允 美)\*

### I. 序論

경남 합천군에 소재하고 있는 해인사(海印寺)는 법보종찰(法寶宗刹)로서 불보사찰인 통도사, 승보사찰인 송광사와 더불어 우리나라의 삼대사찰로 꼽힌다. 해인사에는 2구의 비로자나불상이 대적광전(大寂光殿)과 법보전(法寶殿)에 각각 안치되어 있었는데 크기와 양식이 유사한 동형쌍불(同形雙佛)로 알려져 있다. 법보전 비로자나불상 내면에는 883년(憲康王 9)에 완성하였다는 목서가 적혀있으나 대적광전의 불상에는 적혀있지 않아 조성연대를 확실히 알 수 없다. 그러나 동형쌍불이므로 두 불상은 동일시기에 조성되었고 현재까지 전하여지는 불상 가운데 가장 오래된 목조불상임을 알 수 있다. 그리고 두 불상의 복장 발원문을 통해 1167년경과 1490년에 중수가 이루어졌다는 것이 확인되었으며<sup>1</sup> 조성된 이후 계속 중수되었다는 것도 짐작할 수 있다.

1997년 대적광전의 비로자나불을 개금(改金)하는 과정에서 발견된 복장물 일부를 발표하였는데 이 가운데는 고려시대의 요선철릭, 답호, 저고리 4점, 그리고 재단된 소매 한 벌이 포함되어 있다<sup>2</sup>. 현재까지 고려시대의 의복이 온전히 남아있는 것은 불과 몇 점에 불과하므로 고려시대의 복식과 직물 연구에 있어 매우 귀중한 자료로 평가받고 있다. 이후 두 비로자나불상에 대한 전반적인 조사가 다시 이루어졌으며, 2008년에 전체 복장물에 대한 전시<sup>3</sup>가 개최되고 조사보고서<sup>4</sup>가 발간되었다.

해인사 비로자나불 복장물이 갖는 의미는 불교 문화,



<도 1> 법보전 비로자나불상



<도 2> 대적광전 비로자나불상

\* 檀國大學校 傳統衣裳學科 研究教授 · 東아시아歴史文化研究所 교수

## 伝承曼荼羅の真髓を観る

### —塩から求めた場合—

百田 弥栄子\*

#### はじめに

神話伝承の世界〈伝承曼荼羅〉において、塩への関心は相対的に薄い。なぜなら「塩はエネルギーにならない」からである、と宮本常一氏は精査される。

塩はわれわれの体の中にあるものをぐるぐる回して行って、最後にはこれを排泄させるという、つまり循環の機能を助け、そして健康を保全するという働きをするが、塩そのものは、エネルギーを生まない。エネルギーを生む食物は、その中に霊が宿っているというので、たいてい神に祀られるものだが。塩には霊がないので、塩自体を神に祀った例は、われわれ今日までずいぶん調べたが、出て来なかった。そしてそれが塩に対する、ある程度の無関心をもたらしてきた理由になるのではなかろうか（『塩の民俗と生活』未来社 2007年）。

それでも人々が「塩」という生存に不可欠な物質を語っていないはずはないので、伝承曼荼羅に「塩」を訊いてみたいと思う。すると他に類をみない特殊な役回りを務めていた。

#### 一、塩の発見

雲南省楚雄州を中心とした彝族の間に流布する叙事長詩「梅葛」<sup>メイコー</sup>は、羊が塩をみつけたと謳う（梅葛は曲調の一つ）。

丘に羊の群を放牧しているうちに、大綿羊の姿が見えなくなった。あちこち探したが見つからない。三十三日後、綿羊は戻ってきた。羊たちは大綿羊を囲み、嘗めている。羊飼いは大綿羊の毛を撫でてみると、塩っぱい。それで注意して大綿羊の後をつけて行った。大森林は草深く林は塩水で満ちていた。獣たちが水辺を囲んで水を嘗めている。塩水だった。河の上手と下手に知らせておくと、皆駆けつけてきて美味しい塩水だと喜んだ。僂僂族<sup>リウ</sup>が来て煮てみたが、失敗した。漢族が来て煮てみると、二度目に成功した。誰かが塩を煮出すには石羊に行くのが良いと聞きこんだ。こうして石羊は石羊鎮という町になった（『梅葛』雲南人民出版社 1959年）。

\* 東アジア歴史文化研究所 教授



## 1881年における朝鮮国人孫鵬九の東京大学医学部 留学案件について

横 田 素 子\*

### はじめに

小論は、明治14年5月に来日した「朝鮮国朝士」<sup>1</sup>一行61名のうち金鏞元の随員として来日した「孫鵬九(손봉구/Son Bonggu)」の東京大学医学部留学案件について考察するものである。

この「朝鮮国朝士」<sup>2</sup>という表記及び概要については、拙論「明治期における日本海軍初の朝鮮国人留学生金亮漢について」<sup>3</sup>に記述しているため、重複表記を避けたく、註に収めることとした。また、小論では、原資料の翻刻以外はこの表記を以て進めるものとする。

孫鵬九の東京大学医学部留学に関する資料の存在を確認したのは外務省外交史料館所蔵「戦前期外務省記録」の簿冊「対韓政策関係雑纂/明治十四年朝鮮国視察員朴正陽来航関係」における「目録・第五號」<sup>4</sup>である。該目録中、「四、朝鮮國視察官金鏞元随員孫鵬九ナル者醫學研究ノ本郷醫學部ニ入學被差容度旨加藤大學綜理ニ照会往復」<sup>5</sup>及び「五、朝鮮視察官金鏞元随員孫鵬九ナルモノ大學医学部へ入學ノ□ノ處邦語究査ノ爲メ入學遅延ノ旨加藤大學綜理へ通知書」<sup>6</sup>の記載を確認した。

これまで近代日本における最初の朝鮮国人留学生は、当時私塾であった慶應義塾<sup>7</sup>に学んだ「兪吉濬」<sup>8</sup>「柳定秀」<sup>9</sup>と、同じく私塾であった同人社<sup>10</sup>に学んだ「尹致昊」<sup>11</sup>の3名であるといった認識であったが、彼らとともに来日した朝鮮国朝士一行の中に存在した留学生として、昨年、拙論にて「金亮漢」が日本海軍に約2年に亘って造船、製鉄、航海の術を修学していたことを防衛省防衛研究所並びに外務省外交史料館の所蔵資料に拠って検証した。また、併せて「孫鵬九」の存在についても言及した。結果的に孫鵬九は東京外国語学校における外国人教師<sup>12</sup>となり、留学生としての当該案件は未遂であったと筆者は考えるが、ともすると、東京大学医学部における朝鮮国人留学生受入れの第1号となっていたかもしれない史実を検証したいと考え、小論にて考察するものである。

\* 東アジア歴史文化研究所 教授・内蒙古大学 客員教授